

勝持寺

勝持寺は小塩山の麓に位置し、自然景観や四季の移ろいを楽しめる人気の観光スポットです。春には境内に 100 本の桜が白と淡いピンク色に咲き誇ります。そのうちの 1 本は、高名な歌人で僧侶の西行法師（1118 年～1190 年）が植えた木の 3 世として特に有名です。西行桜として知られ、それにちなんで勝持寺はしばしば「花の寺」と呼ばれるようになりました。境内や周囲の山々の斜面にはたくさんのもみじの木が植えられ、夏には緑豊かな景観をつくり出し、秋には鮮やかな色彩で辺りを埋め尽くします。冬は落ち着いた風景の中で静かに物思いにふけることができ、時には積雪で境内が真っ白に染まることもあります。また勝持寺には、保存状態の良い多様な仏像が所蔵されています。なお、2 月は寺院が閉まっているのでご注意ください。

略史

寺伝によれば、この寺院はもともと 679 年に修行僧である役行者（634 年～701 年?）によって創建され、791 年に天台宗の開祖である最澄（伝教大師、767 年～822 年）によって規模を拡大して再建されました。838 年当時、その敷地内には 49 のお堂や塔、そして他にも建物がありました。しかし、京都の大半の地域同様、勝持寺も将軍の継承争いである応仁の乱（1467 年～1477 年）でほとんどが破壊されました。唯一残った建造物は、南東約 500 メートルに建つ 9 世紀に建てられた仁王門で、寺院の主要な参道の始まりの場所を示しています。現在のほとんどの建物は 16 世紀後半に建てられたものです。

瑠璃光殿

瑠璃光殿には、様式、大きさ、時代が異なる 19 体の仏像が安置されています。この寺の本尊は、治癒の神である薬師如来像で、左手に持った薬瓶に右手を伸ばす姿が表現されています。台座の前には、その薬師如来像を小さくした仏像がガラスに収められており、これは大きな仏像の内部で発見されたと言われています。

本尊の両側には十二神将の仏像があり、それぞれの頭には十二支のモチーフが置かれています。薬師如来像の両側には、月光と日光（それぞれ、月光と太陽光の菩薩）の仏像が安置されています。月光菩薩は月を表す白い円盤を持ち、日光菩薩は太陽を表す赤い円盤を持っています。彼らは共に薬師如来の脇侍として安置されています。

お堂の奥の隅には、高さ 3 メートルの仁王像が 2 体建っています。これらは、もともと寺院の入り口を守るために仁王門にあったものです。お堂の左手正面には、勝持寺で僧侶となった武士であり歌人でもある西行法師の坐像が安置されています。仁王像と薬師如来像は、どちらも国の重要文化財に指定されています。

927 年に大御所天皇（885 年～930 年）の勅により納められた木造扁額が床上に展示されています。著名な書家である小野道風（894 年～966 年）の揮毫により寺号が刻まれました。扁額の横にあるカエルの置物は、柳の枝に何度も登ろうとするカエルを見て忍耐の大切さを小野道風が再認識したという物語にちなんでいます。扁額の右側には、高位の公家で書道家、そして茶人や学者でもあった近衛家熙（1667 年～1736 年）の扁額に対する認証状があります。

阿弥陀堂と不動堂

瑠璃光殿の隣にある阿弥陀堂は、無限の光と命をもつ仏陀である阿弥陀如来を祀っています。石段を登ったところに不動堂があり、不動明王が祀られています。この不動明王は信者を守り、厳しさある愛情で導くと信じられている精悍な姿をした神です。勝持寺の不動明王は、特に目の病気の治癒にも関係が深いとされています。お堂の裏側に回ると、奥の擁壁に掘られた小さなくぼみに不動明王の石像が祀られています。